編集後記

▼特集「学校・教育に求めるもの」へ会員の皆様に寄稿をお願いしましたところ、高校生、保護者、主婦、教員・元教員など多くの方から貴重なご意見をいただき、厚く感謝申上げます。

▼近藤明彦さんは、日本政府への「国連子どもの権利委員会の最終所見」が、前回（九八年）の指摘と同様に、わが国の「教育制度の過度に競争的な性格が子どもの肉体的および精神的な健康に否定的な影響」を及ぼし、「子どもが最大限可能なまでに発達することを妨げている」と懸念していることなどを挙げ、国際的基準からみて、わが国の学校・教育の問題点を明らかにしています。

▼森拓人さんは、ここ十年くらいの「父母の変化」と言われる事象が、じつは学校や教員の変化と相関することを具体的に明らかにし、教師の専門性を拡げることを提起。板橋育夫さんは、いじめがもとで不登校になった子どもに対して、学校や町の教育委員会がとった人権感覚が欠けているとしかいえないような行為を告発しています。河合靖久さんは、小学校教員退職を機に教育の楽しさや自ら体験した学校・教育行政や「教員派閥」の不合理を紹介。高橋武昌さんは、地域には学校の学習教材が揃っているという視点から、地域に根ざす学校とは何かを追求しています。

▼成嶋隆さんは、小泉首相の靖国神社参拝が憲法に違反すると初めて断じた福岡地裁判決の意義を明快に示して、それに対する改憲勢力の反発を立憲主義への挑戦と警鐘を鳴らしています。

▼杉本祐一さんはイラク戦争を何回も取材したカメラマンとして、先の「人質事件」で喧伝された自己責任論のまやかしを痛烈に批判。

▼佐藤茂さんは、新潟港中国人強制連行・強制労働事件判決が、初めて国の責任を認め賠償を命じた意義を日本の責任とアジアの友好・平和の展望と結んで強調します。

▼今井楯男さんは、シリーズ臨床現場からの報告（1）として「ひきこもり」の概念を今日的な課題にひきつけて明らかにします。

▼児玉義明さんは、生体肝臓移植者の体験から、『いのちの教科書』（金森俊朗著）をどのように読んだかを紹介し、大人社会こそこれを教科書にして欲しいと訴えます。

▼亀山裕さんは、担任の生徒を少年院に送らねばならなかった体験をリアルに描いて、シリーズ「教師は何をしなければならないか」の中身をいっそう豊富にしています。

▼藤田昭さんは、『世界子ども白書』最新号を簡潔に紹介し、日本の子どもはどうなのかと問題提起。八木三男さんの「春日遅遅」は、はるうらうらの語句をキーワードに雪国の春を縦横に語ります。八木さんが昨年末に上梓した『予後の風色』を吉田三男さんは、「漱石を感じた」書物と紹介。乞うご一読。

▼外山啓さんは、市民の環境保全団体日本ナショナルトラストの、飛騨白川郷の合掌造りを中心とした自然・文化景観等を守る運動に参加した体験や、県内にもその運動が広がっている事を報告します。（小板、吉田）

にいがたの教育情報 NO. 78

2004年6月20日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通1－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。